

佐野栄紀特任教授らの研究チームの論文が
「The Journal of Dermatology」に掲載されました

高知大学医学部皮膚科学講座の佐野栄紀特任教授らの研究チームの論文が、ワイリー社の英文国際雑誌「The Journal of Dermatology」（日本皮膚科学会発行）に掲載されました。

本邦で2021年より開始された新型コロナ(COVID-19)mRNAワクチンは、接種後に様々な皮膚障害を発症することが報告されています。

本研究チームは、mRNAワクチン（ファイザー社製、BNT162b）2回目接種直後より発症した皮膚炎が100日以上遷延した症例を経験しました。この症例は、体幹に広範囲、四肢にも融合性紅斑が散在し激烈なそう痒を伴っていました。この患者さんは、通常の治療では完治せずさらに増悪してきたため来院され、初診時に紅斑の皮膚生検を免疫組織学的に検討したところ、真皮深層の血管内皮細胞とエクリン汗腺上皮内にCOVID-19ウイルスのスパイクタンパク（※）の存在を認めました。

以上の結果から、COVID-19mRNAワクチン接種直後から発症、3ヶ月以上持続し難治性であった皮膚炎の病態に、ワクチンmRNAのスパイクタンパクが関与している可能性が示唆されました。

<論文名>

A case of persistent, confluent maculopapular erythema following a COVID-19 mRNA vaccination is possibly associated with the intralesional spike protein expressed by vascular endothelial cells and eccrine glands in the deep dermis

<和訳>

新型コロナワクチン接種後より発症した難治性皮膚炎は、皮膚病変内の血管内皮および汗腺内に見いだされたワクチンmRNA由来のスパイクタンパクと関連している可能性がある

論文URL : <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1111/1346-8138.16816>

※ スパイクタンパク…コロナウイルスの表面にある突起状をしたタンパク質のこと。

問い合わせ先

高知大学医学部皮膚科学教室

Tel: 088-880-2363